

—韓国語の多義動詞「nohta」について—

盧 玟 周

[キーワード：①韓国語動詞 ②認知的多義 ③動作の連鎖 ④現象素]

1. はじめに

この論文では意味論を基盤において、韓国語の動詞「놓다 nohta」¹⁾ (以下、「nohta」)における多義構造の意味分析を行う。ことに、国広 (1994) で取り上げられた概念である現象素²⁾の考え方をキーワードにした「認知的多義」の視点から、「nohta」の多義構造を考察する。

2. 研究対象と目的

本研究は韓国語の多義動詞「nohta」を考察の対象とするが、考察に入る前に、ここで扱う「nohta」はどのような動詞であるかを簡単に見ておく。例えば、動詞「nohta」に関する辞典の定義は次のようになっている。ここでは『우리말큰사전 (ulimalkunsacen)』、『동아 프라임 한일사전 (Dong-A's prime 韓日辞典)』の2種を取り上げることにする。以下の用例を見られたい。

(1) 『우리말큰사전 (ulimalkunsacen)』(※以下、用例の日本語は筆者の対訳)

놓다

a.

I. ①물건을 옮기거나 하여 어떤 데에 있게 하다.

【物を移すなどして、ある所に存在するようにする】

¶ 꽃병을 책상 위에 놓다. kkochpyengul chayksang wiew nohta.

花瓶を机の上に置く。

¶ 모든 물건은 제자리에 놓다. motun mwulkenun ceycaliey nohta.

すべての物は元のところに置く。

b.

II. ① 들어고 있던 힘을 도로 풀다. 【入れていた力を緩める】

¶ 잡았던 손을 놓다. capassten sonul nohta.

握っていた手を放す。

¶ 당기던 줄을 놓다. tangkiten cwulul nohta.

引いていた綱を放す。

(2) 『동아 프라임 한일사전 (Dong-A's prime 韓日辞典)』

a.

1 (握っていたものを) 放す。

¶ 잡은 손을 놓다. capun sonul nohta.

握っていた手を放す。

¶ 그는 나의 옷소매를 놓지 않았다. kunun nauy ossomaylul nohci anhassta.

彼は私の袖を放さなかった。

b.

2 (ある場所に) とどめる ; 置く。

¶ 책상 위에 책을 놓다. chayksanng wiew chaykul nohta.

机の上に本を置く。

¶ 이 상자는 어디에 놓을까요? i sangcanun etiey nohulkkayo?

この箱はどこに置きましょうか。

上の (1) b、(2) a において「nohta」は、日本語では「放す」と訳しうる。それに対して (1) a、(2) b のようなものは用例によって「放す」義ではなく、「位置づけ」の意味を持つ配置動詞「置く」と訳されていることが分かる。このことから、韓国語の動詞「nohta」は同一の音形を持ちながら、少なくとも「手に握っていたものをはなす」という《放》概念と「位置づけ」の意味を持つ配置動詞「おく」という《置》概念を有する多義動詞であると考えられる。一般に多義動詞には複数の意義があり、各意義はある一定のつながりによって互いに関連づけられていることが指摘されてきた。

しかし、これらの記述では語義間の意味関係が有する全体像はつかみにくい。また、多義の意味を認識した意味の記述とは言い難い。

そこで、次節では「nohta」が持つ語義間の意味関係を明らかにするため、現象素を設定する。そのことによって「nohta」があわせもつ《放》概念と《置》概念とが、どのような関連で一つの多義語として結ばれているかを明らかにする。

3. 分析

3.1. 韓国語辞典「nohta」の記述

本節では「nohta」の意味認識と多義構造について、まず韓国で出版された「韓国語辞典」を比較し、辞典の語義記述を調べ、基本用例とする。

3.1.1. 語義記述

ここでは、「韓国語辞典」による「nohta」が見出し語としてどのように分類されているかを見てみる。以下は、『우리말큰사전 ulimalkunsacen』、『연세한국어사전 yenseyhankwukesacen』、『표준국어대사전 phyocwunkwuketaysacen』、『국어대사전 kwuketaysacen』の4種の「韓国語辞典」（以下、略して辞典1、辞典2、辞典3、辞典4と表す）における「nohta」の記述構造をまとめ、表に示したものである。

表1 「nohta」の語義全体図

種類	記述構造図	語義分類	語義総数
辞典 1 ³⁾		nohta I ①~⑬ nohta II ①~⑧	26 項
辞典 2 ⁴⁾		nohta 「I」 1~18 nohta 「II」 1~6 nohta 「III」 1~8 ※「III」は比喩用法	32 項
辞典 3 ⁵⁾		nohta ①【~을/를 (~ul/lul)、~을】①~⑧ nohta ②【~에~을/를 (~ey~ul/lul)、 ~に (場所)~을】①~⑩ nohta ③【~에게·에~을/를 (~eykey·ey~ul/lul) ~に (人・場所)~을】①~⑧	26 項
辞典 4 ⁶⁾		1~23	23 項

3.1.2. 語義配列

辞典1から辞典4のそれぞれの辞書が語彙を載せる際の語義配列は、一定の規則に基づいて作成されていることであろう。配列順序についてそれぞれの辞書の「編者のことば」をみると、辞典1と辞典2では、現代の韓国語のコーパスから得られた情報を分析し、使用頻度の高い順に「語義」を配列したとあり、いわゆる言語運用に即した方針をとっていることから、現代韓国語の実態を反映させていることに特徴が伺える。また、辞典3に見られる特色は、語義解説の文型による分類である。それをふまえて、語義の

意味を記述する方式を積極的に取り入れ、下位分類を行っている。また、文型の成分は「이/가, 을/를, 예, 에서, 으로, 와/과 (i/ka, ul/lul, ey, eyse, ulo, wa/kwa) が、を、に、から(場所)、で、と」と限定した順に従っている。一方、辞書4では、配列順序における記載は特に示されていない。いずれにしても、全部の内容をあわせると、韓国語動詞「nohta」という音形をとる動詞の概念は、少なくとも2種類以上があり、細かく分ければ20以上の語義があると考えられる。

3.2. 「nohta」の2つの類型

3.2.1. 辞書の大分類

「表1」によれば、辞典4を除いた辞典1、2、3は枝分かれになっていることが分かる。つまり、一つの見出し語の下にまとめられているが、同一義として記述したものではない。これらは同一の音形でありながら、分けられていることになる。すなわち、辞典4が行っている記述は全体を一つの多義語として扱っているのに対し、他の3点の「韓国語辞典」は大きく2つに書き分けるという分類型をしている。

どれも語彙を分類する基準については言及がされていないが、確かなことは「nohta」が2つに大分類されていることである。何故、韓国語の「nohta」という動詞は2つに分けられるのだろうか。また、何によって、別項目に書き分けられているのか、それぞれの意義は何の意味を表すかについて考察する。

3.2.2. 「に」格の有無

国広(1997)は、辞書の記述で最も大きな問題は、多義語項目の記述をめぐる問題であると述べており、次の2つを指摘している。一つは多義語と同音異義語の境をどのようにして決めるかという問題、もう一つは、多義的意味の分析、意味相互間の関係付けの問題であるとした。「辞書によって多義の示し方が異なる理由はいろいろと考えられる。主なものとして、まず多義を区別するときの精度の違いがある。文脈の影響を受けて違って見える語義を細かく追及していけば、多義はいくらでも数を増す。また、多義を区別するときの意味的な基準の取り方の違いということもある…(中略)…基本義と派生義の扱い方にも違いがあり得る。…(中略)…さらに、文型の違いに基づいて配列する方法もある。(1997:174)」と述べ、最後に各語の意味的な性質に従って配列法を変えた方が適切であると述べている。

本節では、「nohta」の大分類に当たって、上記の国広(1997)で多義語における多義分析方法の一例として挙げられている「文型の違いに基づいて配列する方法」を念頭に入れ、「nohta」の大分類する基準を設ける。

まず、「韓国語辞典」の中で、文型の違いによる分け方をしている辞典3を足がかりにして、「nohta」の分類を試みる。以下、辞典3による「nohta」の3つ(㉠~㉢)の

文型パターン (3) とそれらの第一義 (4) を例に挙げたものである。

(3) 辞典 3 による「nohta」の文型パターン

①【～을/를 (～ul/lul)、～を】nohta

②【～에～을/를 (～ey～ul/lul)、～に (場所)～を】nohta

③【～에게·에～을/를 (～eykey·ey～ul/lul)、～に (人・場所)～を】nohta

(4)

a. 辞典 3①-第一義-잡고 있던 멍살을 놓다 capkoissten myeksalul nohta

(つかんでいた胸ぐらから手を放す)

b. 辞典 3②-第一義-책상 위에 책을 놓다 chayksang wiew chaykul nohta

(机の上に本を置く)

c. 辞典 3③-第一義-팔에 예방 주사를 놓다 phaley cwusalul nohta

(腕に注射をうつ)

上記 (4) a から (4) c の文型構造で見られたのは、(4) a は【～을/를 (～ul/lul)、～を】と、「を」格が現れることである。また、(4) b と (4) c は一見異なって見えるが、名詞の「意味役割 (semantic role)」が異なるものと考えられ、同じ文型パターンであると言える。そのため一つにまとめることができ、【～에～을/를 (～ey～ul/lul)、～に (場所)～を】のように「を」格と「に」格を伴う構造をなす。

ここで一つ「格 (case)」の扱いについて断っておきたい。「格」の定義は様々であるが、意味論における格とは「文の中で使用されている名詞によって表示されている事物が、述語によって表示される事態の枠組の中で持っている機能のこと (『言語学』 p. 106)」を指す。意味論的な格の解釈は名詞の働く「意味役割」に近い概念とも言える。

従って、本研究では「対象 (object)」以外の「意味役割」を持つ名詞が存在するか否かに重点をおくために、便宜上「場所 (location)」、「受容者 (recipient)」、「着点 (goal)」を区別せずに「に」格と呼ぶことにする。故に、「に」格があるかどうかによって、3つの文型が2つの類型に収まる。

次にそれらを、辞典 1 と辞典 2 に照らし合わせて語義の意味を確認する。

(5) 辞典 1 a. I 第一義-꽃병을 책상 위에 놓다 kkochpyengul chayksangwiew nohta

(花瓶を机の上に置く)

b. II 第一義-당기던 줄을 놓다 tangkiten cwulul nohta

(引いていた綱を放す)

(6) 辞典 2 a. [I] 第一義 도시락을 책상 밑에 놓다 tosilakul cayksangmithey

nohta (お弁当を机の下に置く)

b. 〔Ⅱ〕 第一義 손을 잡았다가 놓다 sonul capaksstaka nohta
(握っていた手を放す)

文型に基づいた辞典3と同じく、辞典1、2においても、それぞれ(5) a、(6) aは補語の名詞句が「が」格(但し、行為者は省略されている)、「を」格、「に」格を有するものであり、(5) b、(6) bは「に」格を伴わない「が」格(行為者省略)と「を」格のパターンである。さらに、意味の面でも「nohta」という同一の音形でありながら、格構造が異なり「に」格を伴う「nohta」は《ある一定の場所に置く》の意味を表す。それに対し、「に」格を伴わない「nohta」は《掴んでいた物を放す》の意味を表す。すなわち、「nohta」は「に」格の有無により大分類ができ、異なる意義を表す。この手順から分かるように、辞典1、2は最初から2つに分けていた辞典であり、それぞれの第一義が「に」格の助詞の有無により分類されていたことが一つの可能性として考えられる。従って、「nohta」には【～을, (を)】型、【～에～을, (～に〈場所〉～を)】型の2つの類型があり、それぞれ「nohta A」、「nohta B」と呼ぶことにする。その結果が、以下の表のようになる。また、この観点から「nohta」には2つの基本概念《置》と《放》が定義できた。

表2 「nohta」の2つの類型

類型		「nohta A」	「nohta B」
「に」格有無		「に」格助詞あり	「に」格助詞なし
辞典	辞典1	nohta I	nohta II
	辞典2	nohta「I」	nohta「II」
	辞典3	nohta ^[2] nohta ^[3]	nohta ^[1]
文型		【～에～을 (～に〈場所〉～を)】	【～을, (を)】
基本概念		《ある一定の場所に位置させる》=《置》	《掴んでいた物を放す》=《放》

3.3. 「nohta A」と「nohta B」

前節で見てきたように、文型に基づけば「nohta」は「に」格の有無により、2つの類型「nohta A」と「nohta B」に分類できる。そしてそれらの基本概念《置》と《放》が設けられた。しかし、一つの見出し語の下にまとめられ、多義語として記述されたものである以上、それぞれの基本概念の間には共通する何らかの意味関係を有することが説明できなければならない。その意味的に関連性を求めて考察を進めたいと思う。

3.3.1. 「nohta A」の《置》

韓国語世界化財団(2001)が提出した韓国語文型辞典開発(2次年度)の最終報告書によると「nohta」の構文の中で最も頻度が高かった構文は、「[a]이/가(i/ka) [b]에(ey) [c]을/를(ul/lul) 놓다(nohta) ([a]が[b]に[c]をnohta)」の構造であり、その構文の中でも「一定の所に位置させる」という意味をもつ用例が全体の48.36%を占めているという調査の結果が出ている。(장영숙:2007から引用 [a]:行為者、[b]:場所、[c]:具体物)

言い換えれば、使用頻度から言えるものとして「nohta A」の中でも「一定の所に位置させる」という配置の意味を表す語義《置》義が「nohta」の典型的な用法で、語義の頻度順に配列した辞典の第一義と互いに一致していることが分かった。その典型的用法と言えるものの構造と例を挙げる。

(7) 「nohta」の典型的用法の構造

[a]이/가(i/ka) [b]에(ey) [c]을/를(ul/lul) 놓다(nohta)
([a]が[b]に[c]をnohta)』

(8) 영수가 책상 위에 책을 놓다 yengswuka chayksangwiewe chaykul nohta (ヨンスが机の上に本を置く) (※辞典3の例文に筆者が行為者を加えたもの)

(7)の構造から分かるように《置》義は、「nohta」の動作をする主体である「行為者」と行為者が働きかけて移動させる移動物「対象」、またその移動物を位置させる「着点」が存在する。それが指す意義は〈行為者が行為者の領域に入れた対象を移動させて或る場所に位置させる〉となる。以下、《置》義の意味関係を整理すると図1のようになる。

図1 《置》の図式



(◎: 行為者、☆: 対象、△: 場所、点線の☆: 移動)

以上のように、語義の認定において頻度を重視すれば、「nohta」の典型的語義は〈行為者が行為者の領域に入れた対象を移動させて或る場所に位置させる〉を表す《置》と言ってもよからう。

3.3.2. 「nohta B」の《放》

왕광명(2004)の研究では、韓国語の動詞‘놓다 nohta’と‘두다 twuta’の類似性

について辞典記述の用例に基づき、意味分析を行っている。왕광명 (2004) の新しいところは、中世朝鮮語の『古語辭典』から ‘놓다’ の中心義がどのような意義を表すかを調べ、歴史的に古い意義を原義として設定することを試みている点であり、以下の例が挙げられている。

<p>(9) 노트 (동) 놓다 所掠알 다 노하샤 : 盡放所掠 (龍歌 41 章)</p>

(例文は왕광명 (2004 : 13) より引用。例文番号は本論文での通し番号)

こうした、『古語辭典』の用例「龍飛御天歌」⁷⁾を取り上げ、「nohta」の意味が漢字語《放》に該当する意味として現われると提示している。また、『古語辭典』で記載されている「nohta」の本来の意味としては《放》一つしか存在しない。しかし、現代辞典を引いてみると「nohta」は《放》と《置》2つが記述されている。よって《放》が比較的原始的な意義である(2004 : 18)と主張している。確かに、例 (9) の現代語訳⁸⁾から分かるように「노하샤 (nohasya)」は「nohta」の活用形であり、それが指す意味は、《放》であることは間違いない。しかし、「nohta」の原義が《放》のみを表すとは限らない。

例えば、他の古語辭典『李朝語辭典』⁹⁾は、「nohta」という見出し語に《放》と《置》を用例として掲げている。この点からは、「nohta」の原義として《放》のみを認めることはできない。では、《放》と《置》の関係をどのように考えたらいいだろうか。

3.3.3. 《放》義と《置》義の認知的関係としての把握

ここでは「nohta」という動作が表現する事態を明らかにするため、言語化以前を探り、時間軸に沿って詳しく分析してみることにする。そこで3.3.1. の図1が表す対象の移動と時間との関係に注目してみたい。まず、時間的に左側の点線の対象が右側の実線の対象より先に存在して、そこから移動が行われる。そうすると対象が行為者から離れる動きの起点、つまり行為者が「対象を放す」動作が「対象を置く」動作より、先に行われることが認知できる。すなわち、「nohta」の一連の動作の順序を考えると、行為者が対象に働きかけていた動作をやめて終了させるのであり、そのことが同時に次の動作の始まりである。例文を挙げて提示してみると以下のようなようである。

(10) 영수가 책상 위에 책을 놓다 yengswuka chayksangwiew chaykul nohta
 (ヨンスが机の上に本を置く)

(11) 영수가 책상 위에 잡고 있던 책을 놓다
 yengswuka chayksangwiew capkoissten chaykul nohta
 (ヨンスが机の上に握んでいた本を置く)

(10) は、意味的に (11) を含む。(10) の場合は、既に (11) の「擱んでいる」要素が統合されているため言語化されていない。逆に「擱んでいる」要素が統合される以前は、認知的に2つの連続する動作が存在すると予想される。つまり「nohta」には「動作の連鎖」が含まれていると言える。(10) の例でいえば、「置く」の言語化には、その動作に先立つ事情がどうなっていたかは描かれておらず、行為者「ヨンス」と対象「本」との関係は切り捨てられている。もし、そうした事態を復元しようとするならば、「ヨンスが本を持つ、その本を放して…」とか「ヨンスが本を擱む、その本を放して…」のような表現が補われるだろう。逆に言えば、「行為者」が「対象である移動物」に働きかけて、行為者の領域に入れるという段階の動作が始まらないと《置》の動作は考えられない。このように、「nohta」の動作を実現させるためには、前にある《放》動作が前提になるはずである。さらに、「nohta」の一連の動作を前提に焦点を当ててみると、まず行為者が対象に働きかけていた動作をやめて終了させる、そのことが同時に、次の動作の始まりとなる、というように捉えられる。(10)、(11) で言うと、「ヨンスが本を持っている」その動作をやめることは別の見方をすれば、物が働きかけられている状態から自由に放たれたことを表し、「本がヨンスの領域から離れる」へ意義展開する。その瞬間が活性化されている概念が《放》である。このことにより、「nohta」の典型的な用法は《置》であるとしても、その根本的な位置に《放》が存在する可能性を排除できない。

結論的にいうと、本研究では「nohta」の多義構造の出発点として「典型的意義」を優先するか、または「根本的意義」を優先するかという考え方は放棄する。その代わりに両者をまとめるために、国広 (1994) で提案された「現象素」という概念を用いる。そして、「nohta A」の《置》と「nohta B」の《放》とは意味論的にいうと一つの多義語とすべきものであるということを述べる。

3.4 「nohta」の現象素

3.4.1. 現象素の設定

国広 (1997: 226) では「人間の動作を指す動詞の場合は、その動作を現象素として基盤に据え、その現象素をいろいろの角度から捉えたり、焦点を絞ったりすることを念頭において全体を眺めるのがよさそうである。」と、多義動詞を考える上での現象素の有効性を述べている。本節では「nohta」の現象素を規定する。

他動詞である「nohta」は主に人間の動作を表すものであり、動作の連鎖が含まれている複雑な動詞である。それには、現象素の概念を用いるのが有効であると思われる。

「nohta」は、行為者と共に対象を必要とする動詞であり、特に対象であるものは既に行行為者から何らかに働きかけられている状態 (I) である。それが行為者が働きかけ

をやめると同時に、その結果として、行為者の領域にあった対象が外の領域へ離脱する(= 離脱起点) (II)、そして対象が移動を経て (III)、離脱着点 (IV) に着くことになる。このように「nohta」は (I)~(IV) の段階が見られる動詞であることになる。以下、(I)~(IV) にわたる一連の動作を考慮し、全体として表3に示すような現象素を設定することができる。

表3 「nohta」の現象素と動作の連鎖

現象素	行為者焦点、() の内: 対象焦点	「nohta B」	「nohta A」
↓ I 働きかけ ↓ ☆ II 離脱起点 ⋮ III 移動 ↓ ☆ IV 着点	} 行為者が対象に働きかけている (対象: 働きかけられて行為者の領域にある)	I~IIの動作を含み、 IIを焦点化	I~IVの動作全体を含み、 IVを焦点化
	→ 行為者が対象に働きかけをやめる (対象: 行為者の領域から離脱)	↓ 《放》	↓ 《置》
	} 対象は外の領域へ到着		

そして、「nohta」の現象素を次のように設定する。

(12) 「nohta」の現象素

「行為者が対象に働きかけていた動作をやめることによって、対象が行為者の領域から離脱して外の領域へ移動する」

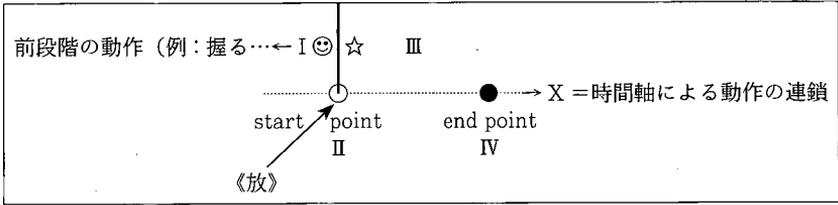
3.4.2. 現象素の焦点化

「nohta」はこの動作全体を現象素として有する動詞であるが、言語世界ではその一部分に焦点が絞られて用いられる。この現象素の定義を基準として、それを異なった面から認識することにより、2つの意義が考えられる。つまり、「nohta」が「nohta A」となったり、「nohta B」となったりするのは、現象素のどの段階を際立たせるかの違いによるということになる。ここで「表3」を立体的に理解するために、図式に示せば、次の「図2」のようになる。

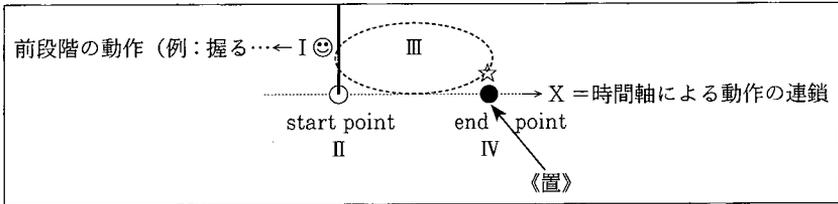
このような現象素の焦点化により、「nohta A」と「nohta B」の基本義が立てられる。基本義は「nohta」という動作を時間順に捉えることを重視し、一連の動作連鎖を表す時間軸との関係を観察する。そうすると、「図2」で分かるように、左側に来るIIを焦点化する「nohta B」の方が優先的に起こり、その後IVを焦点化する「nohta A」の動作が行われる。

「図2」現象素の焦点化

「図2-1」IIを焦点化する《放》



「図2-2」IVを焦点化する《置》



(X: 時間軸による動作の連鎖、☺: 行為者、☆: 対象、→: 対象移動経路、○: 「nohta」の start point、●: 「nohta」の end point、I: 「nohta」動作の前段階の動作、II~IV: 「nohta」の動作、縦の太い線: 「nohta B」(行為者と対象との分離起点)、点線の楕円: 「nohta A」)

結果として「nohta B」は「I. 前段階の動作終了→II. 「nohta」動作の起点 (start point)」つまり、縦の太い垂直線である。線で表せるということは、瞬間的に行われる動作でもあり、対象の移動が含まれる概念とは考えられない瞬間的な範囲である。このことによって【行為者が対象に働きかけている動作をやめることの結果として対象が行為者の領域から離脱する起点 (start point)=その時点】を重視すれば、「nohta」は《放》になる(「図2-1」を参照)。

それに対して、「nohta A」は点線の楕円で「I. 前段階の動作終了→II. 「nohta」動作の起点 (start point) →III. 対象の移動経路→IV. 「nohta」動作の着点 (end point)」全てを含む幅の広い概念である。それに従い【行為者が対象に働きかけていた動作をやめることで、対象が行為者の領域から離脱して外の領域へ移動する、その移動の着点 (end point)】を重視し、その着点がある一定の場所であると判断すれば《置》で表すものと考えられる(「図2-2」を参照)。

4. まとめ

本稿では、韓国語の動詞「놓다 (nohta)」を辞典の用例から「に」格の有無により2つの異なる意義と結びつけていることを示した。そして、「nohta」が実現する動作連

鎖から、この動きの「現象素」を捉え、「nohta」の多義に対して一つの解答を提出した。その現象素の概念は「行為者が対象に働きかけていた動作をやめることによって、対象が行為者の領域から離脱して外の領域へ移動する」ということになる。その現象素の一部が焦点化され、「行為者が対象に働きかけていた動作をやめることの結果として対象が行為者の領域から離脱する起点 (start point) = その時点」を重視すれば、《放》概念になる。それに対して、「行為者が対象に働きかけていた動作をやめることによって、対象が行為者の領域から離脱して外の領域へ移動する、その移動の着点 (end point) 特に外の領域が、ある一定の場所」であると判断すれば《置》概念に属する。このように「nohta」の概念《放》と《置》は同一の現象素の下にまとめることができると考えられる。一見、異なるように見える概念は、現象素の焦点化の違いと見なすことができる。従って、2つの「nohta」の概念《放》と《置》は、「同一の現象素を共有する意味を持つ」もので、一つの多義語として扱うべきであるといえる。

注

- 1) 韓国語のローマ字表記はイェール式「The Yale System of Romanization」ローマ字表記法 (Martin, Samuel. E. 1967 参照) に従う。また、日本語訳は筆者が行い、直訳を原則としたものである。
- 2) 現象素とは、国広 (1994) で提唱された概念で、「ある語が指す外界の物、動き、属性などで、五感で直接に捉えることができるものである。従来の「指示物」(referent) に近いが、思想的な背景が異なる。単なる外界の存在物ではなく、人間が認知したものである。その認知のしかたは、言語の用法を通じて捉える。」(国広 (1995: 40) と述べている。(例) 日本語の動詞「とる」(国広 (1994: 23) の例文)

・私は一番大きいのを取った。〈獲得〉 ・庭の雑草を取った。〈除去〉

日本語の動詞「取る」の現象素は、「手で何かを捕らえてその存在場所から引き離す動作そのもの」とし、対象と行為者との関係から〈獲得〉にも、〈除去〉にも捉えられる。

- 3) 한글학회編『우리말큰사전』(1994) 어문각
- 4) 연세대학교 언어정보개발연구원編『연세한국어사전』(2003) 두산동아
- 5) 국립국어연구원編『표준국어대사전』(1999) 두산동아
- 6) 이희승編『국어 대사전』(1982) 민중서림
- 7) 龍飛御天歌 [용비어천가] については、閔賢植『中世國語講讀』に次のように概説されている。(p. 351 より引用、訳は筆者による)。

「1445 年 (世宗 27) に編纂、1447 年 (世宗 29) 刊行。朝鮮王朝の建国を頌祝するため、太祖の 4 代祖である穆祖から太宗までの 6 代組の事蹟を吟じた 125 章

の敘事詩。形式は本文に漢譯詩と諺解を付け加えたもので全 10 卷 5 冊の資料である。ハングル創製後、最初の文献で国文学はもとより国語史資料として貴重である」

8) 《龍飛御天歌 第 41 章》

東征에 功이 몬 이나 所掠알 다 노하사 歡呼之聲이 道에 가득하니 <中略>

現代語訳 (허용 (1977) 『용비어천가』 형설출판사—より)

동쪽을 정벌함에 성공을 거두지는 못했으나, 포로들을 다 놓으시어서,
환호하는 소리가 길에 가득하니.

日本語訳 (筆者が韓国語の現代語訳を訳したもの)

東を征伐するに成功をすることはできなかったが、捕虜を全て放してください、
歡呼する声が道に溢れる。

9) 1964 年、劉昌惇が編纂した古語辭典として延世大學校出版部から発行されたもの。朝鮮時代の文献に記録された語辭、すべてが採録されている。

参考文献

- 風間喜代三、上野善道、松村一登、町田健 (2004) 『言語学-第 2 版』 東京大学出版会
国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』 大修館書店
—— (1986) 「語義研究の問題点-多義語の中心として-」 『日本語学』 9 月号、明治書院
—— (1994) 「認知的多義論-現象素の提唱」 『言語研究』 106
—— (1995) 「語彙論と辞書学」 『言語』 6 月号、大修館書店
—— (1997) 『理想の国語辞典』 大修館書店
—— (1998) 「現代日本語辞典の将来像」 『日本語学』 12 月号、明治書院
—— (2006) 『日本語の多義動詞-理想の国語辞典 II』 大修館書店
河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社
松本曜 (編) (2003) 『認知意味論』 大修館書店
吉本公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』 研究社
閔賢植 (1995) 『中世國語購讀』 開文社
왕광명 (2004) 「'놓다' 와 '두다' 의 용법과 의미에 대한 연구」 서울대 석사학위논문
장영숙 (2007) 「'놓다' 구문의 인지언어학적 연구」 『한국어 의미학』 24

辞典類

- 한글학회 (1994) 『우리말큰사전』 어문각
연세대학교 언어정보개발연구원 (2003) 『연세한국어사전』 두산동아
국립국어연구원 (1999) 『표준국어대사전』 두산동아
이희승 (1982) 『국어 대사전』 민중서림
두산동아 (2003) 『동아프라임 한일사전 (Dong-A's prime 韓日辞典)』 두산동아
劉昌惇 (1997) 『李朝語辭典』 延世大學校出版部
Martin, Samuel. E. et al. (1967) A Korean-English dictionary, Yale University Press.

資料

『우리말큰사전 ulimalkunsacen』 (以下、例文は筆者の対訳)

놓다

I.

- ① 물건을 옮기거나 하여 어떤 데에 있게 하다.
(物を移すなどして、ある所に存在するようにする。)
【例】 꽃병을 책상 위에 놓았다. 花瓶を机の上に置く。
- ② 어떤 기구, 장치, 구조물 따위를 베풀다. (ある機械、装置、建造物などを施す)
【例】 다리를 놓다. 수도를 놓다. 전기를 놓다. 전화를 놓다. 길을 놓다. 밧을 놓다. 橋を架ける、水道・電気・電話を引く、道路を建造する、畷をしかける。
- ③ 넣거나 박거나 하다. 入れるとか付ける。
㉠ 꾸밈 따위로 넣거나 박다. 飾りに入れる、付ける。
【例】 수를 놓다. 무늬를 놓다. 자개를 놓다. 刺繡をする、模様をつける、螺鈿の貝をはめこむ。
㉡ 솜이나 털 따위를 넣다. 綿や羽を入れる。
【例】 솜을 놓은 버선. 綿をいれた足袋。
㉢ 음식에 섞어 넣다. 食べ物に混ぜて入れる。
【例】 밥에 팥을 놓다. ご飯に小豆を入れる。
- ④ 심어 가꾸거나 기르다. 植えて育てる。
【例】 콩나물을 놓다. 豆もやしを育てる。
- ⑤ 수판따위로 셈을 나타내다. そろばんで算を表す。
【例】 수판을 놓다. そろばんをおく。
㉠ 수를 더하다. 数を足す。
【例】 둘에 셋을 놓으면 얼마냐? 2に3を足すと幾つ?
- ⑥ 값을 정하여 나타내다. (참고) 값을 놓다. → 값. 値をつける。

- ⑦바둑, 장기 따위에서 돌이나 말을 두다. 囲碁、将棋などの石、駒をおく。
 【例】 몇 점을 놓고 둘까? 何目をおいて打つか?
- ⑧불을 피우거나 지르다. 火をつける。
 【例】 모깃불을 놓다. 蚊遣り火をつける。
- ⑨탄환을 쏘아 나가게 하거나 폭발물이 터지게 하다. 大砲を撃つ。
 【例】 대포를 놓다. 大砲を撃つ。
- ⑩주사나 침 같은 것을 살 속에 찌르다. 注射や針を皮膚にさす。
 【例】 주사를 놓다. 注射をさす。
- ⑪이자나 세를 받을 셈으로 빌려 (꾸어) 주다. 儲けの目的でお金を貸す。
 【例】 돈을 놓다. 빚을 놓다. 전셋방을 놓다. お金を貸す、貸貸しする。
- ⑫돈을 태거나 걸다. お金を賭ける。
 【例】 얼마씩 놓고 내기를 할까? 幾らを賭けてゲームしようか?
- ⑬어떤 임무를 주어 보내다. ある任務を課して行かせる。
 【例】 매를 놓아 쫓을 사냥한다. 鷹を放って雉を獲得する。(鷹狩りをする)
- ⑭무엇을 보내거나 알리거나 하다. 何かを送るとか知らせる。
 【例】 소문을 놓다. 噂をたてる。
- ⑮속도를 내도록 힘을 가하다. 速度をあげるため勢いを出す。
 【例】 자동차는 시속 100 km 를 놓고 달렸다. 車は時速 100 で走る。
- ⑯상대방에게 어떤 행동을 하거나 해대다. 相手にある行動をしきりに行う。
 【例】 방해놓다. 邪魔をする。
- ⑰스스로 어떤 행동을 해대다. 自らある行動をしきりに行う。
 【例】 (참고) 줄달음을 놓다. → 줄달음. まっしぐらに走る。
- ⑱ '놓고' 로 쓰이어, '문제의 대상으로 삼아' 의 뜻「놓고 (nohko 連用形)」의 形で
 「問題の対象にして」の意味
 【例】 그를 놓고 말할진대... 彼について言うなら...

II.

- ①들이고 있던 힘을 도로 풀다. 入っていた力を緩める。
 【例】 잡았던 손을 놓다. 握っていた手を放す 당기던 줄을 놓다. 引いていた綱を放す。
- ②자유롭지 못하던 상태를 풀다. 解放する。
 【例】 잡은 새를 놓아 보낸다. 獲った鳥を解き放す。
 닭을 놓아 기르다. 鳥を放し飼いにする。
- ③말씨를 낮추다. 言葉づかいを低くする。
 【例】 초면에 함부로 말을 놓다니. 初対面でむちゃにため語を言う。
- ④계속해 오던 일 따위를 그만두거나 아니 하다. 続けてきた仕事をやめる。

【例】 교편을 놓고 한동안 쉬었다. 教鞭を nohko しばらく休んだ。

⑤ 권력, 권리 따위를 포기하다. 權力、權利などを放棄する。

【例】 권력을 놓다. 權力を放棄する

⑥ 근심, 기대, 긴장 따위의 마음을 풀어 없애다. 懸念、期待、緊張、気を緩める。

【例】 걱정 놓으십시오. 安心してください。

⑦ 정신을 잃다. 気を抜く。

【例】 “정신을 놓고 다니느냐? 그것도 못 챙기고…” 気を抜いてどうする? それも 置き忘れてきて…。

(ノミンジュ 博士後期課程)